

コ・プロダクションモデルを基盤とした精神障害者の地域定着支援の構築

社会福祉学科 菅原明美

はじめに

これまでの日本の精神医療は、精神障害当事者（以下、当事者）が保健医療福祉領域の専門知識を有する人（以下、専門家）に従属するという関係性が一般的であったが、両者の関係性は「パートナーシップ」へと変容することが求められている。しかし、歴史的背景からみても、関係性を変えることは、両者にとって容易なことではない。こうした課題の解決に向けて、英国においては、両者間の新たな関係性の構築を目的とする「コ・プロダクション（共同創造）モデル」の概念が普及している。地方自治体も、サービス提供者も、サービス利用者とともに作り上げることが国を挙げて推奨され、多くのガイドラインも発行されている。また、「共同創造は標準にあるべきもの」として既にその位置を確立しており、その結果、英国では、このモデルを活用することで、すでにある人材や力を活用して社会的ネットワークの構築が実現し、高い費用対効果を上げている。特に「コ・プロダクション」を基本原則とした学びの場は「リカバリーカレッジ」と呼ばれ、英国各地で取り組みが進んでいる。

日本においても、三鷹や立川、名古屋、岡山と各地で開講され、美作圏域でも2017年度の準備を開始し、2019年度の本開講に至った。一方で、「私たちがやっていることは、コ・プロダクション（共同創造）を目指しているはずだが、本当にそうになっているだろうか？」「サービス利用者とサービス提供者が対等な関係性を築く具体的方法や工夫は？」そして「その効果はどのように測ればよいのか」と知りたい思いが高まり、2020年2月23日～3月1日、英国リカバリーイノベーション視察研修に参加した。英国視察で

得た情報をもとに、リカバリーカレッジみまさかの今後の課題について報告する。

ImROCとフィデリティ（忠実度基準）

視察した ImROC は、地域社会とパートナーシップを築き、2011年以來、リカバリー志向サービスの実践や改善を積み重ねている。コ・プロダクションを原則とし、コミュニティでサービスを利用する方、サービスに従事する専門職をエンパワメントし、活用し、知識と学習を共有しながらリカバリー促進の可能性を追求している。また、The Institute of Mental Health は、ノッティンガムの精神保健サービスとノッティンガム大学が連携し、メンタルヘルスに関する研究を行っている研究機関であり、リカバリーカレッジの効果について多角的に評価している。ここでは、2012年に、リカバリーカレッジであるための「Fidelity Criteria」が作成されている。

1. Educational 教育的
2. Collaborative コ・プロダクション
3. Recovery Focused リカバリー重視
4. Choice and Agency／選択と主体性
5. Progressive／進歩的
6. Community Focused 地域に根ざしたものである
7. Inclusive 包括的

英国には88か所のリカバリーカレッジが開講されており、リカバリーカレッジの本質がぶれないように、ImROCが中心となり、リーフレットが随時発行され、「コ・プロダクション」の実現に向けてのヒントが発信されている。

「Educational」であること



ノッティンガムリカバリーカレッジ「Opportunity」「Control」「Hope」それぞれのプログラム紹介が掲示されている。

ノッティンガム・ケンブリッジ・ロンドンと3カ所のカレッジを見学した。

「リカバリーカレッジ」で提供されるプログラムの内容や資金源等は地域によって異なるが、ImROCが示すリカバリーカレッジであるためのフィデリティは共通している。リカバリーカレッジみまさかにおいても、そのフィデリティを基盤とした実践を目指しているが、ここで再確認できたことは、「成人教育である」ということである。成人教育は、小児教育とは異なり、「(失敗も含めた) 経験が学習活動の基盤を提供してくれる (経験)」「自分たちが学ぶことについてその計画と評価に直接関わる必要がある」「自分たちの職業や暮らしに重要だと思われるテーマについて学ぶことに興味がある」などの要素を含んでいる。つまり学びの場は、これまでの自分自身の経験を契機にして、よりよく生きるための学びを自ら計画すること、さらに学びたい科目を、専門家とともに創り出すことにつながっているのである。例えば、「金銭の管理を学びたい」という時は、地域にいる会計士に来てもらって、お互いにコースをつくる。また、包摂的で、あらゆる人に機会を提供する、学習障害、移民で言語がわからない人、すべての人を巻き込んでやっていくということもプログラム作成の際に重要な点である。

教育学的モデルとの比較で、医療モデルとして、「デイケア」が挙げられるが、英国は、2011年にデイケアを閉鎖したとのこと。(2020年2月現在で

は、ほとんどが閉鎖し、デイケアで働いていたスタッフは、入院棟か、リカバリーカレッジに配属になったとのこと) デイケアの弱点は、地域と離れ、孤立してしまうことが挙げられ、デイケア内のみ人間関係が確立され、コミュニティの人と分断してしまうことが懸念される。一方で、リカバリーカレッジは、市民も訪れ、触れ合う機会があることで、個人的に知り合うこともある、自然にスティグマが消失するとのことであった。運営する側は、その仕掛けづくりを丁寧にしており、個々人の経験と知識がつながり、お互いの力をシェアすることで、個々が「なりたい自分」を獲得する流れが見えた。

また、「Co-Learning」(ともに学ぶ)という言葉もよく使われていた。作業療法士や看護師などの精神保健にかかわる専門職や、病気を経験したピアだけでなく、雇用する側の人、家族、店で働く人など違う立場の人が話し合うことでともに学び合うことが、お互いの立場を理解する機会となっているようだ。

「Progressive」であること

日本では、「進化していく」「可能性がひらかれていること」と訳されている。リカバリーカレッジ・イーストは、他のカレッジと異なり、まず、カレッジを立ち上げる前に、ピアサポートワーカーの養成をしたとのことである。養成しても働く場がなければとのこと、リカバリーカレッジに着手したとのこと。現在では、「ピアサポートワーカー」という名称で求人があり、あるいは、名称は異なるが、内容はピアサポーターの内容の求人が増えている。英国は、ピアサポーターを創出し、ピアとしての専門職(経験を持った人)を導入することを、国策とし、資金を投入している。「progress」(進化していく)のは、経験がある人だけでなく、一人ひとりの意見が反映され、コ・プロダクションとなるための関係性や価値観の変容も含まれていると考えられる。

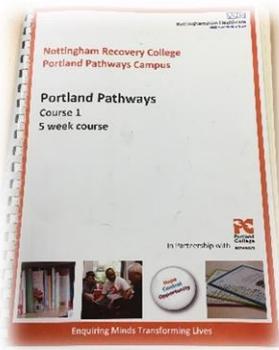


「リカバリーカレッジ・イースト（ケンブリッジ）」

病院の裏手にある。ノッティンガムやロンドンと比べると、建物はやや古い感じだが、親しみやすい印象をうけた。

運営とプログラム開発

「プログラム開発」は最も知りたかったところである。ノッティンガムのリカバリーカレッジでは①セッションプランを出し合う（参加者が、みんな参加できる）→②カテゴリー分け→③ワーキンググループ の流れに沿って、創られる。1つのプログラムが、6週間コースで設定され、（短いコースもある）1セッション2時間で企画され、各セッションは、4つのトピックスで成り立っている。



ワーキンググループにおいて、外部講師、ピアトレーナーとの連携や、経験をつかうのか等、細々と作成していく。ここで綿密な計画を立てる過程こそが、コ・プロダクションを

育む過程であり、丁寧に進めている様子が、伝わってきた。

そして、各プログラムには、それぞれ、実施計画がマニュアルとして一冊にまとめられている。学ぶ目的、方針、伝え方、学び方、アセスメント方法、資源など、書き込まれており、もし担当者が休むことになっても、代替りの人がスムーズに運営出来る仕組みになっているのである。

さらに、リカバリーカレッジ・イースト（ケンブリッジ）では、「The Value of Co-production」評価システムが確立されていた。まず、「コ・プロダクションセッション」を立ち上げる。そこでは、「み

んなの意見が取り扱われているか」、「多様性に対応しているか」、「ニーズに合ったものになっているのか」講座づくりの前後で評価する。その課題を基に、次の講座の計画を立て、「どのような活動をするのか」検討し、コースが出来上がったら、「実施するにあたってはうまくいっているのか」と様々な角度からタイムリーに評価し、同時に品質もチェックしていく。「ゆるぎないプロセスが大切」と説明された。また、「コ・プロダクションというのは、ひとつのプロセスであって、特定の人だけでなく、みんなのためにとって良いものになること。プロセスというものは、自然に日々改善を重ねていくものである。定期的な会議で、話し合い、負荷がかかるものでなく、自然につづけられるものであること」とも話された。コ・プロダクションを日常に落とし込んでいく一端が垣間見えた。

腑に落ちる体験

我々が「日本でコ・プロダクションって難しいのでは？」と思ったのを察知してか、リカバリーカレッジを統括しているシエナ・スキナー氏は、「何度も苦難が訪れたわよ、わたしのこの白髪を見てもわかるでしょ」と笑顔ながらも、現場の苦勞（の一部）を語ってくれた。英国においても、国家戦略とはいえ、当初から専門家が共通の認識もっていたわけではなかったとのこと。「リーダーが良ければ、相手を信じている、可能性を信じてやまない。この信じている人が話しをすると、可能性を信じるのが伝染していく。」とも語っていた。専門職こそが、可能性は開かれていることを信じられる体験を積み重ねなければ、なかなか意識変容は難しいことも、視察から再確認したことである。知識のみならず、腑に落ちる体験をすること、つまり、リカバリーカレッジを通じて、「ともに創造していく」機会こそが重要であると、再認識した。コ・プロダクションの考え方を支援現場に取り入れ、精神医療における文化変革を起こ

すことの困難さと表裏一体である「やりがい」が見えた。

「リカバリーカレッジ みまさか」の実践

2017年度（2018年1月～2月）、岡山県ピアサポート支援事業美作地域交流研修会、2018年12月の体験講座を経て、2019年度（2019年4月～6月）には、11講座で構成される「リカバリーカレッジみまさか」を本実施した。



1 講座の運営は、サービス利用者と専門家が2～3名で組んで担当した。

リカバリー



カレッジの基本原則である「コ・プロダクション」すなわち「ともに創る」を意識したチーム運営を明確な目標として掲げた。にもかかわらず、専門家は常にサービス利用者

を持ち、一方サービス利用者は困難な事象が生じると専門家の指示を待つ行動をとるという衝動に幾度となくかられた。サービス利用者間でも時には、意見の相違に場の空気が緊張することもあった。それでも、『「ともに創る』』とは、専門家がサービス利用者に対して遠慮することでもなく、困難事象を穏便に片付けることでもない」という相互の共通理解により、なんとか乗り越えてきた。開講後の振り返りでは、サービス利用者・専門家の両者から「役割分担して重圧も共有することで、フラットな関係性を感じた」との感想が聞かれた。さらに、サービス利用者は、従来の支援者との関

係性や協働運営における役割を意識するようになったことで、「支援者への依存心が薄くなった」と語っている。例えば、ある参加者の話では、「資格を取得する」等の行動を起こす際、「まずは、主治医に相談する」など専門職に判断や決断を委ねがちだったが、「自分がどうなりたいか」を優先して考えるように変化したという。

また専門家も、「協働やパートナーシップが支援に重要である」という知識自体はもっていたが、必ずしも実践できているとは限らなかった。しかし、「リカバリーカレッジ」の運営を通じて、これまで専門職としての過度な責任感や支援が、「サービス利用者の主体性を奪っていたのではないかと気づいた」との意見も出された。このことから、リカバリーカレッジの運営・開講の体験が、実践場面で専門家自身がいかに振る舞うかを学ぶことにつながったと考える。一連の過程を経て、「ともに創る」とは、順調なことだけでなく困難さも含めて「ともに」という意味であり、創る過程に生じる障壁こそが、かえって連帯感や仲間意識を生む契機となることがわかった。まさに、「腑に落ちる体験」である。専門職の意識の変容こそが、精神保健福祉改革のはじまりなのである。

今後の課題と展望

以下のことを今後の具体的目標としたい。

1) リカバリーカレッジの設立と運用に対するプロセスに着目し、サービス利用者と専門家の関係性の変容について検証する。2) 日本におけるコ・プロダクションモデル導入の阻害要因と促進要因を分析することにより、地域共生社会の仕組みづくりへの具体策を呈示する。3) 日本における『リカバリーカレッジ』の効果を実証し、コ・プロダクションモデルの活用方法について明示する。それを基に、医療や福祉ともつながっていない人（例えば、不登校やひきこもりの課題を抱える人）とつながる地域ネットワークを構築する。